

傭兵、ライオンの団長に晒し で屈する

R18

2026・9・30

目次

第01話

第02話

第01話

【第1話　さらし台の釘の音】

朝から広場で釘を打つ音が響いていた。

工兵の源さんが古い木組みに新しい板を張っている。膝の高さの床と、胸の高さの手すり。この傭兵団で「さらし台」と呼ばれているものだった。

「前に使ったのは、脱走した奴のときだわな」

源さんが金づちを止めずに言った。

「裸で吊られて、夜まで泣いて、最後は小便まで漏らしとった。あれは見とれなかった」

「今度は誰を上げるんだよ」

迅は鎧の肩当てを締めながら聞いた。源さんは首を横に振っただけで、また釘を打ち始

めた。

「迅、前へ」

低い声が広場を割った。

団長の巖が列の先頭に立っていた。ライオンの獣人で、金色のたてがみが肩から背中まで波打っている。迅の頭は巖の胸の高さにしか届かない。

「前衛はお前だ。援護の足に合わせろ。突っ込みすぎるな」

「遅い奴に合わせてたら、旗は取れねえよ」

「取れなくていい。全員で帰ってこい」

「団長がそう言って、取れた旗があったかよ」

列の後ろで誰かが笑った。巖は笑わなかった。太い指で迅の肩当てをたたき、それきり背を向けた。

たたかれた肩が妙に熱かった。

出撃の笛が鳴り、傭兵たちは北の丘へ駆け出した。補給係の透が荷車の横から手を振る。迅と同じ村から出てきた、ひょろっとした若い男だ。

「迅、無茶するなよ！」

「するに決まってんだろ」

迅は笑って、先頭を走った。



丘の上の敵陣は思ったより薄かった。

迅は剣を抜き、槍の列の隙間へ体をねじ込んだ。手前の奴を切り、次の奴の盾を蹴り飛ばす。敵の旗ざおが目の前にあった。

さおを切ると、旗が泥の上に倒れた。

「取ったぞ！」

叫んで振り返ると、後ろに誰もいなかった。

援護の列ははるか下の斜面で敵に囲まれていた。佐吉の赤い鉢巻が見えた。その横で弥平が膝をついている。

迅は斜面を駆け下りた。間に合わなかった。



夕方、団は宿営に戻った。

荷車に載せた佐吉と弥平の体に、透が布をかけている。迅はその横を通れなかった。左肩に矢が刺さったまま、広場の端に立っていた。

「迅」

巖の声がした。

「天幕に来い。矢を抜く」

「自分で抜ける」

「来い」

それ以上は言わなかった。巖が歩き出すと、迅の足は勝手についていった。

団長の天幕は獣の匂いがした。干し草と、鉄と、雄の汗の匂いだ。

「鎧を外せ」

「……いい。このまま抜いてくれ」

「矢じりが肩当ての隙間に食い込んでる。外さなきゃ抜けん」

迅は奥歯をかみ、胴の留め金を外した。肩当てが床に落ち、下のシャツが血で肌に貼り

ついていた。

巖の大きな手が迅の背中を押さえた。

「息を吐け」

言われた通りにした瞬間、矢が抜けた。

「ぐっ……！」

声が漏れた。膝が崩れそうになり、巖の腕が腰を支えた。

次に来たのは痛みではなかった。

ざらり、と熱い舌が傷口をなめた。

「な、にしてんだ……っ」

「ライオンは傷をなめて治す」

「俺はライオンじゃねえ……っ、やめろ、そこ……っ」

猫の舌をもっと大きく、もっと粗くしたような舌だった。傷口の血をこそげ取るたびに、背骨の奥まで震えが走る。迅は床に手をついた。

巖の鼻先が肩から首筋へ、首筋から背中へ降りていく。

「……団長、もう血は止まってるだろ」

「血の匂いの下に、別の匂いがある」

迅の体が固まった。

「前に出るたびに、この匂いが濃くなる。今日は特に濃い」

「何の、話だよ」

「入団の日から知ってた」

大きな手のひらが迅のズボンの前を布の上から押さえた。

「っ……！」

巖の手のひらの下で、隠し通してきた割れ目が熱く湿っていた。

「ちんぽの代わりに、まんこだな」

「言うな……っ！」

迅は巖の腕を振りほどこうとした。びくともしなかった。

「誰にも言ってねえんだ。透しか知らねえ。水浴びも、小便も、全部隠れてやってきた。前衛で一番切れば、誰も俺の股なんか見ねえ。そうやって、ここまで来たんだ」

「知ってる」

「知ってて、黙ってたのかよ」

「黙ってた」

巖の親指が布越しに割れ目の上を押した。
小さく尖ったところを、ぐり、と潰すように。

「ひっ……！」

「このまんこが、切るたびに濡れてる。旗を取る 때가一番ひどい」

「ちが……っ、ちがう、戦の熱で……っ」

「そうだな。戦の熱だ。だから、お前は一人で前に出る。後ろを見る暇がない」

巖の声が低くなった。

「佐吉と弥平は、お前の背中を追って死んだ」

迅の喉が詰まった。親指はまだ、布の上で濡れたクリをこすり続けている。佐吉の赤い鉢巻と腰の奥をかき回す熱が一緒くたになっ

て、どれが自分の震えなのか分からなかった。

「……罰なら、殴れよ。むちでもいい」

「殴っても、お前は明日また一人で突っ込む」

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ……っ」

「台に上げる」

迅の顔から血の気が引いた。

「さらし台で脱がされたら、全部ばれる」

「そうだ」

「団の全員に、見られる」

「見せる。前衛がどういう体で戦ってたか、全員に知らせる」

巖の指が離れた。ズボンの前には濡れた染みがくっきり残っていた。

「一人で前に出られなくなればいい。前に出るたびに、全員の目がお前のまんこに刺さるようになれば、お前は後ろを見る」

「……そんなの、団長の勝手な理屈だろ」

「そうだ。俺の勝手だ」

巖は立ち上がり、天幕の入り口をめくった。



点呼の鐘が鳴った。

広場に傭兵たちが集まり、たいまつが灯された。源さんの台はもう手すりまで張り終わっていた。

巖が台の前に立った。

「佐吉と弥平が死んだ。前衛が突っ込みすぎて、援護が置いていかれた」

ざわめきが広がった。迅は列の先頭で、背中に視線が集まるのを感じた。

「罰を決める。迅は明日、さらし台に上げる」

「おいおい、前衛様がさらし台かよ！」

イノシシの獣人の猪助が、手をたたいて笑った。

「脱がすのか、団長？ あの生意気な前衛様の、ちんぽの大きさでも見てやるか！」

笑い声が上がった。迅は拳を握った。爪が手のひらに食い込んだ。

巖が源さんの道具箱から白墨を取り、台の手すりに太い字で書いた。

迅、と。

それから迅の頭に手を置いた。重く、大きな手だった。

「今日さらすのは名前だけだ。体は明日、全部さらす」

第02話

【第2話 全員の目の前で】

夜更けに天幕の入り口がそっとめくれた。

「迅、起きてる？」

透だった。背中に荷をしょっている。干し肉と水筒と、迅の着替えまで詰め込んだ荷だった。

「村に帰ろう。見張りの交代まで、まだ間がある」

「……何言ってんだ、お前」

「台に上がったら、脱がされるんだよ。あんたの体、団の全員に見られる」

透は声をひそめたまま、迅の腕をつかんだ。

「僕、ずっと見張ってきたじゃないか。水浴びのときも、あんたが小便するときも。あんたが隠したいって言うから、僕はずっと」

「分かってる」

「だったら来てよ。団長がどうして急にこんなことするのか知らないけど、まともじゃないよ」

迅は答えなかった。

団長の天幕でなめられた感触が、まだ肩に残っていた。布越しにクリを潰された親指の重さも、腰の奥に残っていた。思い出ただけで、ズボンの中がぬるりと湿った。

透に気づかれないように、迅は膝を閉じた。

「逃げたら、佐吉と弥平の前から逃げたことになる」

「死んだ人は、あんたが逃げても怒らないよ」

「俺が怒るんだよ」

透の手が迅の腕から離れた。

「……朝になっても、僕はまだ荷を解かないからね」

透は天幕を出ていった。迅は横になり、目を閉じた。眠れるはずもなかった。



朝の広場には団の全員が集まっていた。

見張り番まで持ち場を離れてきている。源さんが台の下で腕を組み、猪助は一番前に陣取っていた。透は荷車の陰から青い顔でこちらを見ていた。

巖が迅の首の後ろをつかんだ。子猫を運ぶ親猫のようなつかみ方だった。そのまま階段を上がらされる。

台の上に立つと、広場の全員の顔が見下ろせた。

「脱げ」

巖が言った。

「……自分でか」

「自分でだ。胴から脱げ」

迅は胴鎧の留め金を外した。肩当てを外し、鎧を足元に置く。シャツを脱ぐと、包帯を巻いた肩と、胸板が朝の光にさらされた。

「ほう、いい体してんじゃねえか！」

猪助が口笛を吹いた。

「下もだ」

巖の声は変わらなかった。

迅は腰の革帯に手をかけた。指が動かなかった。

「……団長」

「どうした」

「頼む。下は、団長だけに」

「駄目だ」

獣の太い指が迅の手の上から革帯をつかんだ。留め金が外れ、ズボンが下着ごと引き下ろされて、足首から抜き取られた。

広場が静かになった。

最初に声を上げたのは猪助だった。

「……おい。ちんぽがねえぞ」

ざわめきが波のように広がった。

「なんだありゃ」

「まんこじゃねえか？」

「前衛様、女だったのかよ！」

「女じゃねえ！」

迅は叫んだ。声が裏返った。

「女じゃねえよ、俺は……っ！」

「女じゃない」

巖が迅の後ろに立ち、広場に向かって言った。

「こいつは男のカントボーイだ。男の体に、
へその下だけまんこが付いてる。そういう体
で、ずっと前衛をやってた」

巖は迅の両手首を手すりに縛りつけた。縄が肌に食い込む。次に足首を片方ずつ、台の両端のくいへ。

脚が大きく開かれた。股の割れ目が広場の全員に向かって丸見えになった。

「見るな……っ、見るなよ……っ！」

「見ろ」

巖の太い指が割れ目を左右に広げた。

「もう濡れてる」

「うそだろ、糸引いてやがる」

「さらされて濡らしてんのか、前衛様はよ」

猪助の声が一番大きかった。迅は横を向いた。向いた先にも、傭兵たちの目があった。

「ちがう……っ、昨日から、ずっと、団長が……っ」

「俺が何だ」

「団長が、触ったから……っ」

言ってしまうてから迅は唇をかんだ。広場がどよめいた。

巖が台の上に膝をついた。たてがみが迅の太ももに触れた。

「な、にを……」

答えの代わりにあのざらついた舌が、割れ目を下から上へなめ上げた。

「ひいっ……！」

腰が跳ねた。縄が手すりをきしませた。

「あ、あ……っ、やめ、団長、それ、やめろ……っ！」

猫よりずっと粗い舌がまん汁ごと割れ目をこそげる。舌先がクリに引っかかるたび、頭の中で火花が散った。

「ひっ、あっ、ああっ、ざらざら、する……っ、そこ、こすんな……っ！」

「こいつ、団長の舌で腰振ってやがる」

「前衛様の声、聞いたことねえ声だな」

巖は顔を上げない。じゅるじゅると音を立てて吸い、クリを舌の腹で押し潰した。

「んぐっ、う、ううっ、団長、団長っ、見られてる、見られてんだって……っ！」

「見られてるから、こんなに出てる」

巖がまんこから口を離した。口の周りの毛が迅のまん汁で濡れて光っていた。

「前に出るときと同じだ。見られるほど、お前のまんこは濡れる」

「ちが、ちがう……っ」

舌がまた戻ってきた。今度はクリだけを、ざり、ざり、としつこくこする。

腰の奥で、何かがせり上がってきた。止められなかった。

「だめ、だめだ、何か、くる、出る……っ、見んな、見んなぁっ……！」

びくん、と体が弓なりに反った。

割れ目から透明なしぶきが噴き出した。台の板を濡らし、手すりの下から広場の土まで飛んだ。

「うおっ、噴いた！」

「潮まで噴きやがった！」

笑い声と口笛が広場を埋めた。迅は縄に吊られたまま、腰をびくびく震わせていた。

「はっ、はぁっ……っ、あ……っ」

巖が立ち上がった。ズボンの前がはち切れそうに盛り上がっていた。迅の手首ほどもありそうな太さが、布の上からでも分かった。

「ちんぽは夕方だ」

「……は……？」

「それまで、このまま吊っておく」

巖は手すりの縄を確かめ、階段を降りていった。

「全員、持ち場に戻れ。見たい奴は、通るたびに見ていけ」



昼を過ぎても、迅は台の上にいた。

水くみに行く者も、見張りの交代に向かう者も。広場を横切る傭兵たちは、みんな台を見上げていった。

「まだ濡れてんぞ」

「乾く暇がねえんだろ」

脚を閉じようとしても、足首の縄が許さない。風が割れ目をなでるたびに、奥がひくついた。見られていると思うと、また濡れた。

日が傾き始めたころ、台の階段がきしんだ。

透だった。水の入った器を持っていた。

「飲んで」

迅は器に口をつけた。水が喉を流れていく。透は迅のまんこを見ないように、ずっとよそを向いていた。

「迅」

透がふところから小刀を出した。

「今なら、見張りもない。縄を切れる」

迅は透の手元を見た。刃に夕日が映っている。

腰の奥がまたひくりと動いた。ちんぽは夕方だ、と巖は言った。

「……切るな」

「迅」

「切るなよ、透」

透の手が止まる。小刀がふところに戻っていった。

広場の向こうで、たいまつに火が入った。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 傭兵、ライオンの団長に晒しで屈する

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・9・30

レーティング R18